

平成27年度第3回千葉市総合教育会議議事録

1 日 時 平成28年3月29日（火） 午前9時～午前10時10分

2 場 所 第一会議室

3 出席者 市長、中野教育委員長、志村教育長、内山委員、小西委員、和田委員

4 市長挨拶

市長 総合教育会議も3回目ということで、意見交換の中で、少しずつ千葉市が市長部局と教育委員会で目指す「ひとづくり」が見えてきた。重点項目については「ひとづくり」なので、成果が出るのに時間はかかるが、私が市長になってから、ここまで教育委員会と市長部局側で喧々諤々議論して方向を決めていくのは初めてのことだと思う。千葉市の子どもたちや保護者の方々に変化を感じていただき、千葉市の教育の信頼を高められるように、さらに努力していきたい。今日の議論を踏まえ、次に進みたい。

5 教育委員長挨拶

委員長 昨年より検討を進めてきた千葉市の教育に関する大綱が本日の会議で決定される。この間、千葉市の教育をめぐる現状や様々な点について議論し、考えを深めてきた。法律の改正により総合教育会議が設置され、熊谷市長をはじめとする市長部局の方々と深く意見を重ねてきたことは、教育委員会にとっても意義深い。本日の会議で一つの区切りとなるが、教育をめぐる課題はまだまだ山積しており、来年度以降も会議を行いまして千葉市の教育をより良いものにしていきたい。

6 議題

(1) 大綱案について

総合政策局長 資料1に用いて説明

出席者 (意見無く、了承。)

(2) 平成27年度に協議・調整を進めてきた連携事項

(3) 平成28年度に協議・調整を進める連携事項

総合政策局長 資料2、3を用いて説明

内山委員 本市のアイデンティティについては、市長が折に触れているいろいろメッセージを出した結果、相当市民の人たちに身近に感じていただけたのではないかと。

今後、特に子どもたちには現場を見てもらうということを、忙しいとは思いますが、時間を割いてでもやっていただきたい。

放課後の子どもたちの居場所の確保と充実について、平成27年度に千葉大学やJFEスチールとモデル事業を実施したとあるが、どの程度期待できるのか、どんなことをしているのかを知りたい。

いずれにしても子どもの居場所ということで、千葉大学やJFEなどの民間が携わることが一つの手法であり、もう一つは地域の活性化ということも含めて、地域から人材を見つけるということを真剣に考えた方が良い。地域でいろんな方々と話をすると、後継者の問題がある。地域差もあるとは思いますが、ぜひ、体制の強化ということに力を入れていただいた方が良い。これから一緒に考えていきたい。

市長 ありがとうございます。千葉大学、J F Eのプレモデル事業は説明をしてもらった方が良い。

生涯学習振興課長 千葉大学による協力の下、弥生小で西千葉起業塾のノウハウを活用した起業体験を実施。弁天小で、ドローンによる映像撮影等新しい技術に触れること、またパラリンピック選手を講師に迎えて、車いす体験を通じたユニバーサルサービスに触れる体験を実施。みつわ台南小で、千葉アートネットワークプロジェクトのノウハウを活用したアートを通じたコミュニティづくりの体験を実施。登戸小で、インドネシアからの留学生を招き、異文化交流を実施。坂月小で、手編みによるストラップ作成を通じた右脳活性化プログラムを実施。

敬愛大学による協力の下、小倉小で、スポーツサークルの指導の下、多種多様な鬼ごっこを実施、また植草学園大学による協力の下、新聞紙を使用して、花や動物など様々なものの造形を実施。

また民間企業に関しては、千葉県ヤクルト販売の協力の下、緑町小で適正な生活習慣の啓発を行う「おなか元気教室」を開催。J E F レディースの協力の下、小中台南小で、選手と児童との遊びを通じた交流活動を実施。J F E スチールの協力の下、蘇我小で本市とともに歩んだ歴史等を学ぶとともに転炉等通常は外部を入れない場所を特別に見学する体験を実施。

今後、千葉電設協会の協力の下、電気設備について、将来の職業の選択肢の一つとなるような興味を育むプログラムを検討中。

市長 ありがとうございます。それらの調整、コーディネートは教育委員会側で行ったということでしょうか。

生涯学習振興課長 はい。

市長 先日の市民の方々のランチミーティングで、放課後子ども教室のコーディネーターに言われたのが、放課後子ども教室は実態的にはコーディネーター任せになっていて、かつコーディネーターは保護者であるので、保護者が自ら人を探したり、また立ち会いも行っていて、保護者の負担がきわめて重たい。千葉市として、この放課後子ども教室をどのように考えているのかという意見があった。説明のとおり、組織としてやればいろいろできるが、各学校の保護者の方々はそこまでコーディネートができないので、教育委員会で様々な団体とコミュニケーションをとって各学校でやっていただくのであれば、カリキュラムは充実してくるのではないかと。その中で、内山委員がおっしゃったように地域の人材の掘り起しをどう考えるか。たしかに10年、15年するとだいぶ途絶えてしまうリスクがありうらと思う。その一方で、今までとは違う形で子どもたちや地域と関わっていきたいという人たちは結構いる。その方々の活動範囲は今までの地域単位よりも広い。そういう人たちとの結びつきが大きなポイントになるのではないかと。

和田委員 今のことに関連して、例えば、保護者会やPTAの中でも「おやじの会」とか、お父さん方が参加するのがこの10年ぐらいで出てきた。そういう方々をどうやって地域の活動に取り込んでいくのかも課題だと思う。

また地域の人材の新たな掘り起しや今回の大学や企業とのプログラムは与えられるものなので、その中で子どもたちが自主的に行動できる道へ繋いでいくかというプログラムが必要になってくる。教育というのは自立してもらうことが目的であり、与え

られたものをこなすだけではなく、自分たちで作り上げるというのを最終的な目標として与えられるようなプログラムとして育ててほしい。

小西委員

今のところに関連するが、市長がおっしゃったとおり、先日PTAの役員の方々と協議をしたなかで、やはり保護者の方々の負担が大きいということがあった。また子どもルームの保護者の方々は預けているという認識だが、放課後子ども教室は育成なので、ある程度保護者の方々も関わらなければいけない中で、子どもルームの子たちが、放課後子ども教室に行くと、預けているという認識があるのでなかなか保護者の方の協力が得られないということがあり、保護者間の認識の違いで結構トラブルがあるというお話もあった。そこは教育委員会の総合コーディネーターが繋いでいくということが大切だと思う。

また、今は一つの事業に対して、一人のコーディネーターということになっていると思う。先日明石委員がおっしゃっていた、文部科学省が推進していく地域学校協働本部という話もあり、今後は総合コーディネーター機能を強化して、いま色々な団体がやっていることを一つ一つのコーディネーターではなく、総合的にコーディネートしていくのが大事だと思う。

市長

おっしゃるとおり。大事なポイントは、関わりたい、自らも成長したいという方もたくさんいるので、そういった方々が参加できる仕組みにもなっていないといけない。グラデーションのある、いろんなパターンがないといけないと思うし、それをすべてコーディネートするのは、やはり専門の人材が必要になる。そこをボランティアベースで人材を作るのは難しいと思う。今回教育委員会で総合コーディネーターを配置したので、小西委員がおっしゃったように、地域で、地域のためにやりたいと言った人たちの総連携を進め、フィールドを作っていくということが何より大事だと思う。この部分を組織的にやっていく、というのが今までとの大きな違いになっていく。

和田委員

ネットワーク化が大事だと思う。

市長

その部分を人が変わっても続くという形で作りこんでいかなければいけない。それはやはり教育委員会で果たすべき役割ではないかと考える。

「2の地域経済・地域産業を支える人材」に関して、昨日市原市長と意見交換を行ったが、同じ悩みを持っていた。京葉コンビナートを持っていて、大量の雇用があるにも関わらず、市原市の子どもたちがそこに就職していないと伺った。市原市には工業高校が一つもないので、相当な危機意識を持っている。現在、千葉市は市内の工業高校との連携の充実を進めているが、市原市の子どもたちも工業高校に通学しているし、逆に工業高校出身の子どもたちが市原市のコンビナート地域に勤めているという事例もある。行政区で切り分けるのではなく、いろいろな連携ができると市原市長と話をした。同じモノづくりにしても千葉市内の食品コンビナートとJFEだけでなく、市外の三井造船や化学工場とかいろいろ幅があった方が考えるきっかけになってよい。

和田委員

市長がおっしゃった他市との連携に関わってくるかと思うが、千葉市は千葉県の県都にも関わらず、その自覚が千葉市民にはあまりないのではないかと思う。せっかく同じ名前をもち、県都であり、人口も多く抱えているということを意識できるような取り組みをしていくことが、今後、千葉市としてのアイデンティティ醸成につながっていくと思う。それと、郷土教育というと、どうしても歴史とか、過去のものに目が行き

がちになる。そうではなくて、現在の千葉市がどういうものを行っているのか、例えば先進的なドローンの活用やエアレースのほか、マラソンも多く開催されている。そういうことは市民もあまり知らないし、小中学生に至っては全く知らないケースもある。スポーツに関しては、オリパラを意識しているが、サッカーと野球、両方のプロチームがあるということも大きなことである。県都であるということと、現在の千葉市がどれだけ活性化してきているのかということをもっとPRしてよいのではないか。例えば「2016年度の千葉市」ということで、今年度こんなことを考えているというのを、大人向けの市政だよりではなく、小中学生にもわかりやすいような形で、学校を通じて配り、担任の先生がそれに対しコメントするというような、そういうのがあってもいい。

市長

我々は県都であるという認識が戦略として不十分だったと思う。その中で千葉市周辺の人たちと連携してお互いの魅力を高めあうようなところは、今一度私たちは足元を見直そうという議論をしている。

それからアイデンティティの話はおっしゃるとおり。たしかに副読本とかであるにはあるが、2016年のような最新の話はそこに盛り込まれていないし、教育、勉強ということで堅いところもあり、動いているまちと今後将来に向けてというところは十分ではないと思う。これから副読本を今後どうしていくのかという議論の中で波及していくのかなと思う。

志村教育長

今まで教育というと、市政と独立しているというイメージが強くあり、今回大綱中でまちづくりという言葉を入れたことが画期的なことだと思う。まちづくりの中で教育がどんな役割を持つのか考えると、もっといろいろできると思う。今までは躊躇していた部分があるような気がする。指導要領にあることを教えるだけでなく、千葉市の子どもたちに対して、どういう教育をするのが一番いいのかということがこれを機会に考えることができる気がする。例えば先ほどのキャリア教育の問題に関して、千葉市内にある千葉工業高校には、かなりの生徒数が市原市からも来ているという気がしており、市の垣根みたいなものを乗り越えていくことも出来そうな感じがする。あわせて、キャリア教育プログラムの中に入れなければいけないと思ったのが科学教育。本市がこれを打ち出している中で、市の特徴として、最終的にはまちづくりに繋がっていくというスタンスになっていけばよいと思うし、私たちももっとPRしていかなければいけない。大綱にまちづくりを入れてくれたのが良かった。私どもも頑張る。郷土教育に関して、まだ千葉氏や加曾利貝塚の認知度が低いと思うが、説明にあったような施策によって伸びていくのか、楽しみだ。千葉市を理解することで、初めて千葉市に対する自信を持てる部分もあると思う。

中野委員長

市長

自分たちのまちがどういうふうな歴史的な役割を果たして、何に貢献してきたのかわかるようにしたい。また鎌倉時代に対する正しい評価が、世間では行われていないことを実感した。私は歴史好きなので、鎌倉時代が生産者側からの改革であったということを知っているが、恐らくあまり知られていない。京都を中心とした荘園支配に対する現地民としての活動だったという歴史観が確立してきているが、なかなか理解に繋がっていないと感じている。市民の方と話をしても、鎌倉時代の評価が正しくなされていないと感じる。千葉市のみならず、千葉県全体に言えることだが、鎌倉の時代はということだったのか、そこにおける御家人がなぜ武家の棟梁を戴いていた

のか。そこから、なぜ千葉が特に関東において勃興したのか、そこにどういった生産的な構造改革があったのか。これらについてもどんどん伝えていったらいいと思う。その武士というのは日本国民が思っている侍ではなくて、農業ときわめて密接な状態での武士であり、そこを含めた価値観をしっかりと教えていくことが、まさに教育だと思う。

志村教育長 そのためには教師側の力を育てていかなければいけないので、研修が大事になってくる。

内山委員 教育長が話をされたまちづくりについて、地域でどれくらい活性化しているのかというのは、人材を見つけるうえで大きなポイントだと思う。外から見ているとわからない。どういう人がいるのかということも含め、我々も地域活動を少しでも関わりたい。

市長 ありがとうございます。

和田委員 千葉氏サミットがとても楽しみだが、これは本家に全国からみんな集まるというイメージで、非常に重要な取組みになると思う。このPRをどのようにしていくかというのが重要だ。何となく知らないうちに終わってしまったのではもったいない。子どもたちにも幅広くPRして、多くの子どもたちに足を運んでもらいたい。

市長 ここが重要だと思っているが、現状からすると、分家の方がしっかりしているところもあり、私たちが学ぶ機会になると考えている。関係する自治体全員でメリットがあるような、一過性ではない、今後も続けていくフォーラム的なものに発展できるのか、今回がとても重要だと思っている。

和田委員 分家の方が本家に行ってみたら、本家はちゃんとしていないと思われると恥ずかしい。

市長 そういうこともあるかもしれないが、刺激をもらいつつ、それぞれの自治体が教育的な観点からどういうことをやってきているのかということを見意見交換しながらともに連携していく。

中野委員長 オリンピック、特にパラリンピックは障害者スポーツへの理解を深めるうえで非常に良いが、どちらも様々な国の方が来てくれて、千葉市全体で世界の人たちをどのようにもてなすかということも重要になる。海外の方々に対して、日本的なものを提供することになる。市立千葉高校、稲毛高校には茶道部があるのでしょうか。あるならば、今から準備をして、興味ある方にそういう場を提供することは、逆に子どもたちにとっても勉強になると思います。

市長 外国の方々から見て、日本や千葉の独特のものに触れたいという気持ちは当然あると思う。今でも外国の方が千葉、幕張にお越しになっていますから、そういう方々に対していろいろな仕掛けをし、反応もしっかり整理して、2020年を迎えなければいけない。オリパラの庁内会議でもおもてなしの部分は、全庁横断的にやらなければいけないという話をしている。教育委員会でも、子どもたちの中にも海外の人々に触れたいと思う人たちも多いだろうから、そこはぜひやらせていただきたい。

オリンピック・パラリンピックで重要なのは、自分のことについて改めて見つめ直すいい機会になることと、様々な価値観に触れることだと思う。国籍や肌の色や宗教、場合によってはLGBTの話もあるが、多様な価値観に触れることが、人生にとって想像力であり、許容度というか、受け入れる度量にも繋がってくる。国籍、国の話だけでなく、教育委員会でも、宗教とか民俗とかいろいろなものに対する多様性を想像

- できるオリパラ教育を行って欲しい。その中に障害者教育も入ってくる。
- 中野委員長
志村教育長
今の段階から少しずつ準備をしていくのが良い。
大綱の中にしっかりと位置付けられたことが良かった。前回の東京オリンピックは参加するのではなく、ただ見に行く。今回のオリパラはそれぞれの立場で市民が関われるという点が全然違う。そこの部分を強調して、学校でも積極的に出ていくと変わっていくと思う。車いすスポーツも、保護者が初めから行ったからではなく、子どもに誘われて見てみたら、魅力に気が付いていくというケースが結構あった。この大綱に位置付けられたものについては教育委員会としても積極的にやっていかなければいけないと考えている。
- 市長
子どもたちに、現場に触れてもらうことができるような取り組みについて、我々も議論したい。
- 和田委員
アイデンティティ醸成に繋がる郷土教育は、一般市民に対するアピールというところもあるが、それ以外の4点はどちらかというと子どもたちの、学校教育が中心となってきている。うまく生涯学習や市民に対する視点を入れていかないと、議論が偏ってきてしまう。
- 市長
そのとおり。オリパラも子供だけではなく、まち全体でやらなければいけない。市長部局側と教育委員会側で協議・報告し、一緒にやっていく。今議論している放課後子ども教室も、保護者、地域の方々も学びに参加できるような形に将来的になって欲しいという意見もある。それが本当の意味での学校が地域の中での学び舎になる瞬間ではないか。積極的に関わりたい保護者は、自分自身も生涯学習の中で成長したいというのがあり、負担があるけどもやるという保護者もいて、保護者、地域の方々も提供するだけではなくて、学びの方にも最終的には入っていくような形が、更なる先にあるほしいと思う。
- 和田委員
保護者会で取り組まれていた方が、「お月謝のいらぬ習い事だ、お金を払わないでこんなに学ばせていただける」と言っていた。
- 市長
将来的にそうならなければ、学校が閉じたままであまり変わらないことになってしまう。大人側の話を中心に総合教育会議の中では議論する視点として持っておくというのは重要な示唆だ。
- ## 7 その他
- 総合政策部長
参考資料を用いて説明。
- 和田委員
この資料は、市民の皆さんに既にPRをしているのか。
- 市長
まだできたばかりである、これから出前講座やったり、市民対話会とか、いろんなところで使用していく。
- 和田委員
案外、東京に目が向いていない。
- 市長
そのとおり。地理的な要因があると思う。
- 小西委員
ホームページなどにはいつ頃公開されるのか。
- 総合政策部長
出来るだけ早く公表する予定である。
- 市長
本編とうまく組み合わせて公表する。メッセージ性も込められていて、よく出来ている。
- 和田委員
わかりやすい。
- 小西委員
選挙授業で子どもたちにデータを見せて考えさせても面白い。

市長 先生も使いながら、授業で使っても面白い。

和田委員 東京でもない地方でもない新しい価値観というところが、これが一つの言葉で言い表せると良い。

市長 そのとおり。パッとイメージできるものを我々も作らないといけないと思っている。今のところ、大都会と田舎っていう二つの価値観でしかイメージできないところがあって、田舎と都市を両立して生きていくハイブリッド型の生活をイメージできない。朝サーフィンしてから仕事する人もいる中で、そういう生活の仕方が存在するとは、一般的には思えない。でもそれが千葉ではできてしまうなかで、そういう生き方をどういうふうにわかりやすく伝えるのがポイントになる。

東京の人だと、引退したら長野に住むことに憧れを持つ人がいる。でも私からすると千葉で生きていけば、現役時代に同じような生活が出来るという思いがある。千葉市だけでは完結できなくて、外房とかとの結節が楽だからできるライフスタイルでもあり、そこをどういうふうに全体的な見せ方ができるかがポイントになる。子どもたちにも考えて欲しい。

和田委員 そういう自覚を持って生きていくのが大事だ。あまり都会の人間だと思わず、ちょっと田舎的な要素と、都会的な要素と両方持っていることに誇りを持てればいい。

市長 そのとおり。鎌倉武士と江戸武士の違いはそこだと思っていて、江戸武士というのは参勤交代もそうだが、自らの生産の場と離れた形で都市生活を送って、切り離されている感じがする。一方鎌倉武士は生産の場と館がそのまま隣接しているように思える。同じ武士と言っても生活が全く違う。歴史から、今から、全部ひっくるめて千葉の価値観として提示したい。ここはみんなで議論しながら作っていきたい。本当は共創都市圏よりももっといいことばはないのかと議論したが、他にいい言葉がないので、とりあえずこれにしている。

和田委員 共創都市圏はちょっと難しい言葉。すぐに入ってこない。

市長 市民の中から何か生まれてくるのかなと思っている。

和田委員 東京でも地方でもないということが一番魅力につながる。

市長 この言葉を模索していくことになる。

終了（10：10）